東方蟲妖伝

楽求 一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方蟲妖伝

【Ｎコード】
Ｎ５２８２Ｔ

【作者名】
楽求　一文字

【あらすじ】
彼が人で無くなった時、他は彼を追い立てた。
しかし、彼は他を恨まなかった。
時が経ち、他は彼に戻るよう伝えた。
しかし彼は山から動こうとはしなかった。
里を離れ、一人で暮らす人間（？）のお話。
これは東方の作品を順に再現・再構築したものです。

零ノ壱話　久那土裳

時間は遥か昔、天狗が鬼から妖怪の山を乗っ取った後――――
沈んでいく夕陽の中、その様子を家の外から見ていた久那土(くなつちも)裳は煙草の紫煙を溢した。

土「妖ってモンは、戦が好きなのかねぇ・・・？」

鬼と天狗が争いを起こすと聞いたとき、土裳は自分も戦おうかと酒天童子に進言していた。
しかし鬼達は、自分達の戦だ、自分達でけじめを付けると土裳を拒んだ。
土裳もそれ以上推す事は無く引き下がった。

土「・・・これからこの山は一体どうなるんだろうなぁ・・・。ま、予想はついてるが・・・」

土裳はもう一度深く紫煙を吐き、家の中へ入った。
そして囲炉裏の薪に火をつけ、夕餉を拵え始めた。
すると、玄関からカタリと音がし、何かが隠れる気配がした。

土「・・・」

土裳はそれを無視し、夕餉を作り続ける。
すると今度は土裳の少し後ろから小さな話し声がした。

？「・・・この人も悪い鬼ですかね？」

？「だ、だとしたら危ないですよぉ～。早く大天狗様のところに帰

りましょうよ～。」

片方は興味心身で見かけたこの家に入ってきた、もう片方は片方を止めたが先に行ってしまったので付いて来た、そう印象付ける会話だった。

？「でも椛、もし本当に鬼なら私達でやっつけないと」

椛「む、無理ですよ！文ちゃん、早く戻って他の方に頼みましょうよ！」

文「でも、悪い鬼は全部倒さないと危ないんですよ！？それに」

土「・・・天狗のガキが、何の用だい？」

これ以上真後ろで口論されてはかなわない、といった様子で土裳が夕餉から手をとめずに声をかける。

文「ひっ・・・？！」

椛「ふ・・・ふわーーーん！！」

文は驚いただけだったが、椛は怖さからか泣き出してしまった。

土「あ～、ほら泣くな泣くな。あっしは鬼じゃねぇ、ただの人間さ。」

そう言って空いた両手を挙げ敵意が無いことを示す。

しかし文は椛の前に立ち、両手を横に広げ土裳を警戒していた。

文「も・・・椛を虐めるならただじゃおきませんよ・・・・！！」

勇敢にも椛の前に立った文だったが、内心泣き出しそうだったのは言うまでも無い。

現に広げた両手は震え、声は上ずっていた。

土「だからお前さんらに手を出す気は無いって・・・・」

土裳がさも面倒くさそうに立ち上がると、文の緊張はピークに達した。

文「や・・・・やる気ですか！？」

もはや震え、声も完全に裏返って目には涙を浮かべていた。

文「やる気なら私が相手にな」

グ～・・・・

文の緊張の糸をすっかり切ってしまったその気の抜けた音は文の後ろでぐずっていた椛からだった。

椛「ぐすっ・・・お腹・・・ヒック・・・空きました・・・」

文「・・・・！！」

緊張の糸は切れたものの文は驚きのあまりその場で硬直していた。

土「・・・よかったら飯、食ってくかい？」

文「ふぇ・・・・？」

土「ご飯だよご飯、もうすぐ出来るから、そこで待ってな」

言い終わると支度の途中だった夕餉を急いで作り始めた。

文「な・・・何にもしないんですか・・・？私達、天狗ですよ・・・・？」

土「最初から何もしないと言っただろ？大人しく座ってな」

文「は、はい・・・」

二人は土裳が襲ってこないと分かると安心して、だが慎重に囲炉裏を囲んだ。

◆

土「ほれ、出来たぞ」

そういって二人に膳を差し出す。

二人は膳を受け取り、それぞれ食べ始めた。

土「どうだ、旨いか？」

椛「はい、美味しいです」

椛と文は敵意や殺意が無いと悟り、すでに警戒心を解いていた。
文はと言えば今度は土裳の家に置いてある物に興味が行ってしまっていた。

文「あ！あの箱はなんですか！？」

文が指差したのは部屋の隅に置いてあった背負子だった。

土「ああ、あれか、あれはあっしの商売道具さ」

文「商売？」

土「まぁ、まだお前さん方にゃ早い話さね」

そういって文の頭をなでる。

椛「ふあ・・・」

椛は腹が膨れると眠たそうに欠伸をした。
土裳はその様子を見てどこか懐かしさを覚えた。

土「今夜はあっしの家に泊まっていくといい、たいした物は無いがゆったりするには丁度良い。」

文「え、でも・・・」

土「ガキが夜歩くにゃ此処は危険すぎる。それに怖がらせちまったお詫びだ」

椛「眠いです・・・」

椛は半分ほど意識が飛んでいるようだった。
もはやいつ眠ってしまってもおかしくは無い。

土「お連れさんは大層眠たそうだが？」

文「いいんですか？」

土「構わんよ、ただし条件がある」

文「なんですか？」

土「明日、大天狗に合わせてくれ。話がしたい」

文「そんなことで良いんですか？」

土「ああ、そんなことでいい。さ、布団を敷くから退いてくれ」

文「あ、はい」

文は急いで今いる場所から退いた。

土「うちには布団は一つしかない。二人で使うことになるが良いか？」

文「ふぁ・・・土裳さんはどうするんですか？」

文も眠たくなったのか欠伸をし、目をこすり始めた。

土「あっしはまだやることがある。気にするな」

そう言うと土裳は立ち上がり、外の方へ歩いていった。

土「さ、ガキは寝る時間だ。おやすみ」

文「・・・おやすみなさい。ほら椛、布団に入って寝ましょう」

椛「ふにゃ・・・？」

二人は布団に入るとすぐに寝息を立て始めた。

――――――土裳の家の外

その日の夜空はあまりにも星の数が多かった。

土裳は煙草に火をつけるといつもの様に紫煙を吐き出した。

その瞬間、勢いよく夜風が土裳に吹いた。

土「鬼達は消えたか・・・」

土裳は遠くを見つめながら、懐から瓢箪に入った酒を出し高く掲げた。

土「山のために戦い、山のために散った勇敢な鬼に乾杯」

そう言い終わるが早いか一気に酒を煽る。

そして呑み終わると、誰も居ない筈の夜空に向かって話しかけた。

土「お前らの事だ、任侠に順じて律儀に幻想郷から出て行きやがるだろうと思ってな、居場所を用意しておいた。お前ら鬼はこの場所

から出すには惜しい。地下なら天狗の目も届かずちょうどよかろう。
」

そしてゆっくりと立ち上がると家の戸を開けた。

土「・・・まあ、幻想郷にいる限りすぐに会えるだろうよ。次、会える日を楽しみにしてるぜ」

土裳は文たちを起こさないように静かに戸を閉めた。

零ノ壱話　久那土裳（後書き）

ご感想・ご評価お待ちしております。

零ノ弐話　天狗の里

―――次の日

「ふぁ・・・」

椛は大きなあくびをした後、辺りを見回した。

「あれ・・・？文ちゃん・・・？」

寝惚け眼で文を探すも、どこにも見当たらない。
しかも、あろうことか自分が歩いていないのに景色が動いていた。

「ふぇ・・・！？あれ・・・？あれ・・・？」

「お、起きたかい」

不意に前から声をかけられる。

「ひゅえ！？」

驚きついでに舌をかんでしまった様だ。
それを見て土裳は愉快そうに笑った。

「あっはっは、いやあ、朝なかなか椛ちゃんが起きなくてな、仕方が無いから背負ってきたのさ」

よく見ると自分は土裳におぶられている。

そして土裳の手には昨日のあの重そうな背負子があった。
その上には自分の小ぶりな剣と盾。
落ちる事がないよう、紐でしっかりと背負子に結び付けられていた。

「文ちゃんは・・・？」

「ああ、あの子ならそこにいるよ」

と、土裳が空のほうを指差す。
土裳が指差した方向を見ると、確かに文が気持ちよさそうに飛んでいた。

「おーい、文ちゃーん、椛ちゃん起きたぞー！」

土裳が声をかけると文は気づいたのかゆっくり降りてきた。

「椛、起きるのが遅いですよ！！」

「まあまあ、文ちゃん、椛ちゃんも昨日が昨日だし、な？」

「むう・・・」

文はふてくされた様に頬を膨らませた。
その様子を見て土喪は小さく笑った。

「さあて、そろそろ着くみたいだな」

「？どこにですか？」

椛が小さな首を傾げる。

「どこって・・・お前ら天狗の住処だよ」

「「え！？」」

二人の声が重なった。

「な、なんで分かるんですか？」

「す・・・すごいです！どうやって分かったんですか！？」

二人は目を爛々と輝かせて土裳に聞いた。

しかし土裳は少し考えた後、「また今度な」と話を濁した。

と、そうこうしている間に天狗の住処に着いた。

―――天狗の住処

「この度は二人を届けてくださり、忝う御座います」

大天狗は普段下げる事の無い頭を深々と下げた。

「何、家に来たのを偶々保護しただけです。気にしないでください」

土裳は自分は何もしていない、というかのようにそれを否定した。

「それでも、何か御礼をしないとワシらの気持ちが治まりませぬ。

何か、ワシらにできる事は御座いますかな？」

大天狗は笑いながらその白い長く伸びた髯をなぜつつ問うた。

しかし土裳は真顔になり、先ほどより強い口調になった。

「ならば、一つ有ります」

「ほお、何ですかな？」

相変わらず大天狗はにこやかに自分の髯を撫でている。

「貴殿が文や一族に言った言葉、訂正して頂きたい」

大天狗の髯を撫でる手が止まった。

「・・・ワシが貴方に迷惑な事を何か、言いましたかな？」

部屋の空気が一気に張り詰める。

土裳と大天狗の出す殺気で、周囲の天狗からも余裕が消えた。

「ええ、あっしには直接関係はございませんがね、貴殿の「「悪い」鬼」、この言葉を訂正して頂きたい。」

「・・・ほう・・・何故なのか訊いてみたいものですな・・・」

「何故・・・？・・・鬼たちはいきなり山に来たあなた方にも全く怯まずに戦った。負けたとはいえ、その勇姿をあなた方が判断することは出来無ぇはずだ」

「貴様・・・！！」

「・・・・・・・・・」

周囲の怒りで今にも襲い掛かろうとする天狗たちを目で制し、大天

狗は黙ったまま何かを考え始めた。
しばらくして、大天狗は一言呟いた。
「・・・そうじゃの」
そしてもう一度深々と頭を下げた。
「土裳殿。此度の妄言、誠に失礼した。」
「大天狗様！？」
「確かに土裳殿の言う通りじゃ。鬼には鬼の、ワシらにはワシらの理由がある。それぞれの理由に善悪なぞ付ける方がおこがましい事じゃった・・・。」
「しかし・・・」
「まだ分からぬか！！」
大天狗が一人の天狗に怒鳴りつける。
「ワシらにとってこの山は生命線、それは鬼たちにとて同じ事！！本来ならばワシらが「悪」だと言う事！！」
「・・・！！す、すみません・・・」
怒鳴りつけられた天狗は恐縮し、小さくなっていた。
「・・・土裳殿、お見苦しいところを見せた。此処から先の話、他

の天狗には席を外してもらう事にしよう」

「あっしは一向に構わないが・・・」

「かたじけない」

大天狗が周りを一睨みすると、周囲の天狗は皆席を立ち、外へと向かった。

天狗が全員出て行ったところで土裳が口を開いた。

「では、本題に入りましょう・・・」

「・・・よかろう」

大天狗は、土裳の目を見て全てを悟ったかのように思える口ぶりだった。

零ノ弐話　天狗の里（後書き）

わーい、また連続投稿（笑）

零ノ参話　蟲ノ病

「――――その話、誠ですかな？」

大天狗は話を聞き終わると懸念を抱くかのように尋ねた。

「ああ、もちろんだ」

大天狗の表情とは一変、土裳はヘラヘラと笑っていた。

「・・・しかしそのような話、すぐには信じられませんな・・・」

「まあ、それも承知の上での話です」

土裳は吸っていた煙草の火を消すと大天狗に向き直った。

「・・・で、条件の方は飲んで頂けますか？」

「・・・・・・いいでしょう」

「かたじけない」

そう言うと土裳は立ち上がり、建物の出口へ向かった。

「・・・その話が本当なら」

「はい？」

土裳は足をとめ、大天狗の言葉を聞こうと大天狗の方を向いた。

「その話が本当ならば、治して欲しいものが一人おる」
大天狗は真剣な眼差しで土裳を見た。
その言葉と表情を見て、土裳もそれが普通ではない事を確信した。

――――天狗の住処　集落地

「その者はどこに・・・？」

「こちらに」

大天狗はある一軒の家の戸を開けた。
すると、中からえも知れぬ異臭が漂い始めた。
大天狗は鼻を覆い臭いを嗅ぐまいとするが、土裳は平然と中の様子を見た。
中には布団が敷いてあり、その中には天狗がいるようだった。
布団の中の天狗は土裳たちの気配に気付くと弱々しく声を出した。

「大天狗様・・・」

「お前の病を治してくださる、と言う方を連れてきたぞ」

「失礼」

土裳は何の躊躇いも無く入ると、家の中を見回した。

「・・・いますね。それも群れを成している」

「はい？」

「原因は蟲ですよ」

土裳は背負ってきた背負子を天狗の寝ている布団の横に下ろすと、中からいくつかの道具を出した。

「大天狗殿、しばらく席を外して頂けますかな？」

「・・・よかろう。では、頼みましたぞ・・・」

大天狗はゆっくりと戸をあけ、外に出た。

大天狗が外に出るや否や、土裳は天狗に話しかけた。

「・・・布団をとっても？」

「・・・はい」

土裳が布団を取ると、天狗の身体には夥しく奇妙な草が生えていた。

「・・・やはりな」

「・・・この病は、治りますか・・・？」

天狗は依然として弱々しく声を出す。

「ええ。・・・ですが、その前に一つだけ質問しても良いかい？」

「・・・はい、何でしょう・・・？」

「・・・あんた、誰かを殺しましたか？」

「・・・なっ！？」

天狗は土裳の言う事に驚いて目を丸くする。

「・・・あんた、何を言って・・・」

「・・・・・・まあ、試しに聞いてみてください」

「・・・・・・・・・」

天狗は怪訝そうな顔をして土裳の話を聞き始めた。

「あんたのその身体に生えているのは骸草と言う蟲だ。普段は泥状のモノだが、生き物の死臭に反応し死骸から芽を出す。本来ならばまず生きた身体に芽を出す事はあれど、成長する事は無い。」

「・・・なら、どうして・・・」

「・・・唯一つだけ、生きた身体でも成長する事例がある」

「・・・・・・？」

「そいつの身体に、死臭が染み付いてる時だ」

「・・・」

「・・・無論、それを追求する気は無い」

「・・・今から話す事、文と椛には言わないで頂きたい・・・。」

土裳は懐に手を伸ばし、煙草を取り出した。
そして火をつけ、紫煙を吐く。

「・・・・・・なら、とっとと吐いて楽になりな」

――――

「今話したのが全てです。」

「・・・」

「こんな俺でも、治されるのですか・・・？」

土裳は二本目の煙草に火をつけた。

「・・・ああ、あっしの仕事は蟲に侵された物を治す事。個人の私情は関係ないんでね」

天狗はそれを聞くと、力なく笑った。

「・・・そうですか」

「今から薬を塗る、動くなよ」

「・・・はい」

――――

ガラ・・・

土裳が戸を開けると、大天狗が待っていた。

「おお！土裳殿、どうでしたか？」

「ええ、治りましたよ」

「・・・良かった、これで安心して・・・」

安心する大天狗の顔を見てから、土裳は文たちの元へ向かった。

零ノ参話　蟲ノ病（後書き）

蟲って異形で、しかも曖昧なモノですよね。
でもそこがいいと思える自分はもう駄目かもしれない。

零ノ終話　治療

―――天狗の集落　外れ

「・・・ここか・・・」

天狗の集落の外れにある崖
ここは鬼との争いの時にある鬼がこの場所の岩を萃めた為に出来た崖である。

「・・・ま、何かを隠すならここだわな・・・」

そういうと土裳は何の躊躇いも無く崖を飛び降りた。

「・・・目測で大体、２町（約２２０ｍ）って所か・・・」

土裳は落ちながらその崖の深さを測り、周りを見渡した。

「ふむ・・・岩盤の形、鉱石の種類は良好、罅割れも・・・ないな。
よし、これならとりあえず崩れる心配はない」

落ちながら周りを調べているうちに崖の底が見えてきた。

「ん・・・もう底か・・・」

２００ｍも落ちてきたとは思えないように軽々と土裳は底に降り立った。
そして上を向きニヤリと笑った。

「全く・・・あっしも随分なお人好しだぜ・・・こんな辺鄙な所まで来るとはな・・・」

そう言うと土裳は落ちてきた時と同じように周りを見渡した。

「お、いたいた・・・。今回の治療はおまけだ、あの子達に感謝するんだな。」

土裳は目的の４人を見つけると歩み寄った。
しかしその４人は動くことは無く、体中をひどい怪我が蔓延り、そして、それを隠すかのように蝿や死出蟲が雲の様に取巻いていた。

「・・・随分と酷ぇ様だな・・・」

土裳は４人のうち一人の傷を見てそう言った。
そしてそのままその一人の目を開き生死を確認する。

「心肺停止から大体六刻・・・。ま、普通の医家、ましてやなんの知識も無いヤツがみたら死んでるわな」

言い終わると背負子を降ろし、中から煙草を一本取り出した。
そして、煙草を銜えると火を付けた。

「ほれ蝿に死出蟲共、治療の邪魔だ。とっとと失せな」

煙草の紫煙を蟲に吹きかけると、虫達は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

「さてと・・・まずは怪我の治療から始めますかね・・・」

背負子の中の別の棚から包帯と何枚か重なった薬包紙を取り出すと、土裳は４人の傷の治療を始めた。

◆

「ふう・・・これで怪我の方は大丈夫だな・・・。まだ三途の川渡るなよ？」

土裳は血で汚れた手を洗うものを探したが無論、谷底にそんなものはない。
洗うのを諦めて背負子に手を伸ばす。
煙草の入っていた棚から色の違う煙草を取り出すと、今まで吸っていた煙草の火をその煙草に付けた。
そして今まで吸っていた方の火を消し、新しい方の煙草の煙を吸う。
しかし土裳はすぐには煙を吐き出さず口を動かしていた。
３０秒ほど口を動かすとやっと煙を吐き出した。
その煙の色は普通の煙草のそれではなく、蒼い、しかも塊のようにその場に留まった。

「これでよし・・・。後はアイツ等が集まるのを待つだけだな」

そう言って土裳はその場に座り込むと背負子から乳鉢と乳棒を取り出し、次に別の棚から奇妙な形の、例えるなら漏斗のようなものも取り出した。
土裳が先の煙を見上げると、すでに夥しい数の廉子（れんず）と言う蟲が煙に集まっている。

「おー・・・集まってる集まってる、お前さん等にゃ悪いがちょい

と仲間を分けてくれな？」

土裳は立ち上がると廉子の群れの一部を掴んで漏斗の様なソレの中に入れた。
そして座り込んだ瞬間、廉子達は崖の上へ逃げていった。
それを気に止めず、土裳はソレから出る液体を乳鉢の中に集め、他の薬草と一緒に擂り潰していく。
潰し終わると、土裳は中に入っていた半固形のモノから丸薬を４つ作った。

「よし・・・こんなもんか・・・」

出来た丸薬を４人の口に入れる。
しかし、そんな事をしても４人は動くことは無く、何も変化が無かったように思われた。

「・・・やっぱり一人分を四人分に分けると効きが悪いな・・・」

――――暫くして

「――――っはァ！！」

天狗の一人が息を吹き返した。
次いで他の天狗達も次々と息を吹き返し始めたようだ。

「おはようさん」

天狗たちは土裳の存在に驚いたようだった。

「あ・・・あんたは・・・？」

「そんな事はどうでもいい」

「は・・・？」

天狗たちの顔が呆然となる。
無論天狗達にとっては当然のことなのだが。

「どうだ？お前さんがた、羽は動くかい？」

何がなんだか分かっていない天狗達に土裳はほれ、羽を動かしてみなと傷の具合を確かめさせる。
天狗たちは言われるがままに羽を動かしてみた。

「あ・・・ああ」

「よし、じゃあ帰るぞ」

「帰るって・・・どこに・・・？」

「何処って・・・お前らの住処に」

「はあ・・・」

天狗は益々分からない、と言った様子で首をかしげる。
そんな天狗に土裳は少し痺れを切らしたようだ。

「だぁ～！お前ら自分の娘らの事、心配じゃねぇのか？文ちゃんと椛ちゃんが集落で待ってんだよ！！」

「文・・・？」

天狗は何かを思い出したように土裳を見た。

「そうだ・・・文は！文は無事なんですか！？あの子は好奇心が強くて何処へでも」

（あー・・・そうだった・・・薬の副作用で暫く記憶が飛ぶんだった・・・）

「お、落ち着け。二人は無事だ。さっきも言った通り、二人は集落だよ」

「良かった・・・」

「さ、とっとと出るぞ。こんな所にずっと居ちゃ色々集まって来ちまう」

「は、はい」

―――天狗の集落　広場

「お父さん、お母さーん！！」

「何処行ってたんですか！？すっごく心配したんですよ！？」

文と椛は二人の姿を見つけると走り寄った。

４人の天狗が文達を受け止める。

「な？ここで待ってるといい事あるって言ったろ？」

土裳はヘラヘラと笑いながら文に声をかけた。

「はい！」

「土裳殿」

後ろから骸草に寄生されていた天狗が土裳に話し掛けてきた。
そして向こうで話があると言って建物の裏へ連れ込む。

「どういう事です！？あの４人は・・・」

「はぁ？あの４人は山の中腹で怪我してただけだぜ？」

「は・・・？」

天狗は唖然として土裳を見つめた。
しかし土裳はそんな天狗を可笑しなものを見たかのような目で見た。

「そりゃお前さんが見間違えたんじゃねぇか？あっしが見た時は動く事はできなくても元気だったぜ？」

「そんなはずは・・・」

「じゃあ、お前が罪を感じてるんならあいつらが怪我してる間、面倒見てやれ。じゃあな」

そう言うと土裳は広場の方へ歩いていった。
天狗は土裳に声を掛けようとしたが、思い止まり立ち止まる。

「・・・ありがとうございます」

天狗は土裳の背中に小さくお礼を言うと自分の家へと向かっていった。

「んじゃ、あっしはそろそろ帰るぜ」

「あの・・・」

土裳が治した天狗たちがおずおずと声を掛けてきた。

「ん？どした？」

「治療費は・・・」

「ああ、それならもう貰ったよ」

「え？」

天狗達は怪訝な顔をする。

「文ちゃんと椛ちゃんの笑顔、これで十分」

「は、はぁ・・・」

（ま、大天狗との約束もあるしな・・・）

「文ちゃんに椛ちゃん」

天狗達に抱き上げられている2人に話しかける。

「はい？」

「何ですか？」

そして2人の頭を優しく撫でた。

「暇な時や困った時はいつでも来な？」

「「はい！！」」

「元気が良くてよろしい。んじゃ、またな」

そう言うと土裳は背負子を背負い直し、集落の出口の方へと歩いていった。

零ノ終話　治療（後書き）

次回から本編開始です。

壱話　発端

ある日、土裳はいつもの様に寝床から起き上がり、朝食を摂っていた。
ふと見上げると、窓の外が赤くなっているのが確認できる。

「・・・？」

窓の外の異様な景色に疑問を覚えつつも、土裳は朝食を口に放り込む。
とその時、誰かが家の戸を激しく叩いた。

「土喪、いるか！？」

「・・・慧音・・・何か用か？」

戸の向こうから聞こえる声だけで誰かを判断する。

「すぐに来てくれ！！里が・・・皆が・・・！！いや、その前に・・・」

「・・・里がどうなったって？」

土裳は慧音から詳しく事情を訊こうと、食事を中断し戸を開けた。
そこには、息を切らせた慧音とおぶられている阿求の姿があった。
阿求の顔は苦しそうに歪み、汗を大量にかいている。

「土喪！！」

「その様子じゃ、よほど大事のようだな。・・・んで、その子は阿礼の子か。」

土裳が阿求の額に手を当てる。

「・・・相当熱があるな。とにかくまずは中へ入れろ。」

「ああ・・・！」

慧音は急いで土喪の家の中に入り阿求を布団に寝かせる。
土裳は霧が入らないように戸を閉め、布団へと歩いていった。
そして、阿求の手を取り脈を測る。

「・・・で？里では何が起こっている。」

「この間からあの霧が立ち込めて・・・それを吸った里の者が急に体の不調を訴え始めたんだ・・・！」

「なるほど・・・。慧音、お前は大丈夫なのか？」

「ああ、私は何とも無い。それよりも土喪、阿求は・・・」

土裳は心配そうに見つめる慧音の頭をに手を置く。
そして、優しくにこりと微笑んだ。

「安心しな。大方この霧の妖気にあてられたんだろう。ここに居りゃ安全だよ。」

「・・・・・・・・・」

慧音は顔を真っ赤にしながら俯いた。

「さてと・・・薬を作り始めるとしますかね。」

そんな慧音をよそに土裳は布団近くに置いてある箪笥の中から擂鉢と乳棒を、違う棚から幾つかの薬草を取り出す。
そして、薬草を擂鉢の中に入れ粉々にし、また他の薬草を入れる。
それを何回か繰り返していくうちに、薬が完成した。

「・・・よし、こんなモンだな。ほれ、慧音」

そう言って薬の束を慧音に放り投げた。

「おっと・・・！？」

慌てて慧音が薬をキャッチする。

「それ、阿求に飲ませてやんな。あと、阿求が落ち着いたら里の奴らにも持って行ってやれ。」

土裳は立ち上がり、部屋の隅に立て掛けてある御札を何重にも貼り付けた刀を持った。

「土喪？どこへ行くんだ？」

「いや何、ちょっと身の程を知らない小娘を窘めにな。じゃあ、留守は頼んだ。」

刀を腰に差し、土裳は戸をゆっくりと開けた。

壱話　発端（後書き）

次回より紅魔郷編をお楽しみください。

弐話　宵闇

――――――　霧の湖付近・上空

土裳は博麗神社の裏手にある霧の湖への道に来ていた。
先程の事を霊夢報告しようと中へ入ったが見当らない。
どうやら、既に異変解決に出たようだ。

「う～・・・。」

下から呻き声がし、金髪に赤いリボンの少女が現れた。

「さっきの巫女と魔法使い、容赦無さすぎだよ～・・・。ん？」

少女は此方に気付いて止まる。

「お兄さんも人間？」

「・・・一応な。お前、名は？」

「私は宵闇の妖怪ルーミア。で、お兄さんは食べてもいい人間？」

「あっしを食うと腹壊すぞ。」

「え～・・・お腹空いてるのに。でも、食べられるんだよね？」

「お前、人の話聞いてるか？」

土裳が呆れたように溜息をつく。

「さっきの二人の様にはいかない！月符「ムーンライトレイ」！」
ルーミアがスペルカードを発動すると、色とりどりの弾が向かって来た。
さらに、その逃げ場を塞ぐかの様に二本のレーザーが土裳を挟む。
「スペルカード・・・最近出来た戦闘様式・・・だっけ。」
「どうしたの？もう降参？」
「冗談を・・・。試しに使ってみるか、畏怖「峨赦髑髏の吐息」」
土裳がスペルを発動すると同時に風が止み、弾幕も消えた。
ルーミアもスペルを発動した体勢のまま固まっていた。
よく見ると、肩が小刻みに振るえ目が潤んでいる。
「やれやれ、こんな程度で相手を畏れるとは・・・。おいルーミア・・・だっけ。」
「ひゃぅっ！？」
土裳がおでこを小突くと、ルーミアの小さな体が軽く跳ねた。
そして、ルーミアは恐る恐る土裳を見る。
「この勝負、あっしの勝ちでいいかな？」
「ふ・・・ふわーーーーん！」
しまった・・・スペルとは言え泣かしちまった・・・。

「ほら、泣くな泣くな。」

土裳が頭を撫でてやるも、一向に泣き止む気配は無い。

・・・そうだ、この子腹減ったとか言ってたっけ・・・。確か保存食が・・・。

土裳は背中の背負子から糒(ほしいい)を取り出し、ルーミアに渡す。

「これ食うか？」

「ふえ・・・いいの？」

今度は不思議そうな顔をして土裳を見上げた。

その様子に、土裳は笑顔で答えた。

「構わんよ。まさか泣くとは思ってなかったからなぁ・・・。」

「・・・お兄さん、やさしいね。」

手渡された糒を見つめながらルーミアが呟く。

「そうか？」

「・・・・・・・・・」

ルーミアは黙って頷いた。

「だって、私妖怪だし、人間食べるし・・・。」

「だからなんだ？」

「え？」

予想外の言葉に、ルーミアは絶句した。

「妖怪だの何だのなんてあっしから見れば変わらない一つの命だ。例え、それがどんな異形だったとしてもな。」

「・・・・・・・」

「そんなに食い詰めてるならいつでも家に来い。飯ぐらい作ってやる。・・・っと、そろそろ行かないと。」

土裳はこの先にある霧の湖へと向かおうとした。

「・・・ねえ。」

「ん？」

「お兄さんの名前は・・・？」

「あっしか？あっしは久那土裳。・・・じゃあな。」

土裳は左手を振って、ルーミアに別れを告げた。

◆

土裳がいなくなった後。

ルーミアは少し太い木の枝に座っていた。

「土裳・・・。えへへ、土裳お兄ちゃん・・・。」

ルーミアは妖怪であり、ましてや自分を襲った相手に食料をくれた青年のことを思い出し、嬉しそうに頬を少し赤らめて笑った。

弐話　宵闇（後書き）

畏怖「峨赦髑髏の吐息」は相手を威圧し弾幕を打ち消すスペルです。
効果対象は限られますが、相手に怪我をさせず勝てる事があるので
土裳が使用する頻度は高いです。

参話　氷精

――――――――　霧の湖・上空

ルーミアと別れた後、土裳は霧の湖に来ていた。
なんだか先が騒がしい。
どうやら、件の巫女と魔法使いが湖を縄張りとする氷精と弾幕戦をしているようだ。

「ちょっと！二人がかりなんてずるいわよ！」

「最初に「いいハンデね！」何て言ってたのはどこの誰よ・・・。」

「流石は馬鹿（チルノ）だぜ」

「う、うるさいわね！バカっていった方がばかなのよバーカ！」

「あ、今自分で言った。」

「い、今のなし！」

放っておくといつまでも口喧嘩していそうなので早めに割り込む。

「よう、霧の字に霊夢。」

「お、土裳じゃないか。・・・って、いい加減その呼び方やめて欲しいぜ・・・。」

「ハハハ、お前が弱い限り呼び方は変えねぇよ。」

「・・・言ったな？」

そう言うと、魔理沙が土裳を鋭く睨む。
土裳もそれに呼応するかのように、しかし余裕を含んだ目で魔理沙を横目で見た。

「じゃあ、この異変が終った後私と勝負しろ！今回こそはとっておきで倒してやるぜ！」

「望む所、と言いたいが・・・、その言葉、あっしに一度でも勝ってたら大層説得力があるんだがなぁ？」

「うっ・・・。」

ニヤニヤと笑う土裳に対し、魔理沙は冷や汗をたらした。
その少し後ろでは、霊夢がクスクス笑っている。

「ちょっと！アタイを無視するなー！！」

「っと、悪い悪い。」

口では謝ってるものの、土裳の顔はにやけたままだった。

「・・・このふたりと戦ってるって事はお前さん、この霧を発生させてるやつの場所知ってると見て良いんだな？」

「当然じゃない！なんたってアタイは最強だし！」

「そうか。・・・で、この霧の犯人のいる場所は？」

土裳の表情が一変し、鋭い眼光でチルノを睨む。
その刹那土裳の左目が黒く染り、瞳が怪しく光る。
肩からは黒い煙の様なモノが幾本か立ち昇っていた。
土裳に威圧され、チルノだけならず魔理沙や霊夢も少し後ずさった。

「こ・・・この湖を越えて少し行った所・・・。」

チルノは後ろを指差した。
彼女の目は怯えきり、体は細かく震えていた。

「そうか、ありがとうな。・・・それと、こいつはその情報の礼だ。」

土裳はいつものように笑うと、丸薬が幾つか入った小瓶をチルノに放り投げた。

「・・・何、これ？」

「お前さんの知り合いがこの霧で倒れてるんだろ？それを飲ませりゃ治る。」

「・・・何でそれを？」

「なぁに、造作も無い事だ。・・・じゃあな。それ、早く持って行ってやれよ？」

土裳は空気を蹴ると、一気にスピードを上げ霧の湖を抜けていった。

―――――――

土裳が去った後、チルノはすぐに自分の住処へと帰っていった。

「・・・やっぱり、あいつには勝てる気がしないぜ。」

魔理沙は帽子を直しながら呟いた。

「・・・あんな怒った土裳さん、初めて見たかも。」

「そうなのか？」

「・・・ええ。今回の異変、私たちの出番は無いかもね。」

「・・・・・・・・・・」

参話　氷精（後書き）

さあ、ある意味オリジナルな展開に！
・・・やっべ中国戦どーしよ・・・。

肆話　門番

――――――　紅魔館・門前付近

土裳は霧の湖を抜け、紅い霧が濃くかかった館の付近に来ていた。
既に日は傾き、紅の中に朱が混じり始めていた。

「・・・確かに館らしきものが見えるが、これ以上空中にいても視界が悪くなる一方だな。一旦降りるか。」

土裳は館が見え始めたところで音も無く地に降りた。
改めて館を見ながら歩き始める。
そして背負子から煙草を取り出し、火をつけた。

「こんな館、この近くにあったか？・・・ん？」

ふと前の方を見ると、館の門らしきものが見えた。
その前では、紅い髪の女性が転寝をしている。

「・・・あれは、門番か？」

ありゃあ、ぐっすりと眠ってるな。
この分なら近づいても気付かれはしないだろう。
まあ、この方がこっちも都合が・・・

「せいっ！」

門の前にいた女性は、いつの間にか土裳の懐に入って今にも拳を突いてこようと構えを取っていた。

そして、そのまま吸い込まれるように女性の突きが土裳の水月に突き刺さった。

「んっ・・・！」

土裳は突きの勢いに身を任せつつ、後ろへ飛び退り勢いを殺した。

「・・・私の突きをいなすとは、貴方なかなかやりますね。」

「あ～・・・あっしとした事が油断した。まさか寝た振りをしてるとは思わなかったぜ。」

「・・・貴方の名前は？」

「久那土裳。何、ただの通りすがりの蟲師さ。」

「蟲師？・・・どんな仕事かは存じませんが奇怪な職業をしていらっしゃるようですね。」

「奇怪ねぇ・・・。確かに奇怪と言やぁ奇怪だな。・・・そんな事より、あっしも名を名乗ったんだ。アンタも名乗ったらどうだい？」

「これは失礼。」

そう言うと、女性は再び構えをとった。

「私の名は紅美鈴！！誇り高き吸血鬼、我が主レミリア・スカーレットのおわすこの紅魔館の門番！！我が主の名において、尋常に勝負です！！」

「・・・いい気迫だ。」

「ハアァアア！！」

気合と共に美鈴が土裳に向けて踵を落とす。
土裳はその場を軽く飛び退き、それをかわす。
すさまじい轟音と共に美鈴の足が地面にめり込んだ。

「こりゃ、当たったらひとたまりも無いな。」

「これならどうです！彩符「彩雨」！」

至近距離から土裳に向かって虹色の弾幕が襲い掛かってくる。

「・・・ッ！」

土裳は咄嗟に右へと大きく地面を蹴り、弾幕を危うくかわした。
そして、美鈴を確認しようと元の場所を見るもその姿は無く。

「今です！紅寸剄！」

「・・・・・・！」

またも懐に入っていた美鈴が腕に弾幕を纏わせながら土裳を突き上げた。
土裳は声も出さず、為すがままに突き上げられた。

「止めです！降華蹴・・・」

「おい、あんまり舐めて貰っちゃあ困るぜ。」

美鈴が突き上げた土裳を地面へ叩きつけようとした直後、土裳は先程チルノに見せた目になっていた。
次の瞬間、土裳の姿が美鈴の目の前から消えた。

「女を殴るのは趣味じゃない。だが、今はそうも言ってられないからな。一発だけいかせて貰う。」

美鈴の後ろから声がし、美鈴が振り返ろうとする。
しかし、振り返るよりも一瞬早く土裳の掌底が美鈴の背骨を捕らえた。
背骨を伝い、美鈴の体に衝撃が走る。

「かはっ・・・・！」

そして、美鈴から力が抜け地面に向かって落ちていった。

「・・・っと」

そのまま気絶した美鈴を支え、抱きかかえてやる。
そして門の前に降り立つと、門の脇に美鈴の体をもたれさせた。

「・・・吸血鬼・・・ね。」

土裳は門をゆっくりと開きながら呟いた。
館の本館に辿り着き、ドアに手を掛けるも鍵が掛かっているのか開かない。
仕方なく館の周りを少し回ると別館らしきドアが見つかった。
どうやら、別館のドアは鍵が開いているようだ。
土裳は別館のドアを開き、中へ入った。

肆話　門番（後書き）

・・・いかん、アクションシーンが短すぎるｏｒｚ

伍話　知識と日陰の魔女

――――――　紅魔館・別館

土裳は別館の中へと入り、扉を閉めた。
眼前に広がるのは本棚とそれに納められた幾千の本。
ふと、土裳は近くにあった一冊の本を手に取って読む。

「魔術の本か・・・。あっしにゃ縁が無いものだねぇ・・・。」

そう言って本を元の棚に戻す。

「さて、本館はこっちかね・・・？」

土裳はそこに一つしかない道を進んでいった。
すると

「ちょっと」

不意に本棚の向こうから声が聞こえ、土裳は足を止めた。

「ここは禁煙なのだけれど？」

本棚の陰から紫色の髪をした少女が出てきた。
手には魔術の本。どうやら魔女のようだ。

「おっと、悪い悪い。」

土裳は煙草を口から離すと、何の躊躇いも無くそれを握りつぶした。

ジッという音と共に煙草の火が消える。

「貴方、一体何者？この館に入ってくるなんて・・・。来客が有るとは聞いてなかったわよ？」

「ま、招かれざる客ってこった。お前さん、名は？」

「パチュリー・ノーレッジ。そこの招かれざる客、さっさと出て行ってくれる？」

「・・・嫌だと言ったら？」

「力づくでも出て行ってもらうわ。」

少女は手にしている本を開くと、呪文を唱え始めた。

「Ｊｅ　ｌａｉｓｓｅｒａｉ　ｌａ　ｆｌａｍｍｅ　ｄｕ　ｄｉａｂｌｅ　ｂｒ?ｌｅ　ｃｏｍｐｌ?ｔｅｍｅｎｔ　ｌａ　ｔｏｔａｌｉｔ?　ｔｕ　ｅｔ　ｌ'ｅｆｆａｃｅ　ｄｅ　ｃｅｔｔｅ　ｐｌａｃｅ（悪魔の炎は貴方を焼き尽くしこの場から消し去るだろう）」

空中に魔法陣が出現し、そこから炎の塊が次々と出てくる。

徐々にその塊が一つの形になっていく。

しかし、土裳はそれを見ても焦る素振りを見せようとはしなかった。

むしろその様子を楽しんでいるかのように笑っていた。

「フフフ、魔法か・・・まるで霧の字のようだな。」

土裳は刀の柄に手を掛け、引き抜く。

引き抜かれた刀は錆び切っており、刃の中腹は大きく抉れてその周りは罅割れていた。

「アグニシャイン」

最後の言葉と共に炎の塊が吸い込まれるように土裳に向かっていく。土裳はゆっくりと、刀を「片手」で構えた。

「そんなボロ刀で何が出来ると言うのかしら？」

パチュリーは土裳の刀を見てクスリと哂うと、目下を見るような目で土裳を見た。

「そうさなぁ、こんな事ができる。」

そう言うと、土裳は軽く刀を火の塊に向けて振るった。すると、火が中心から裂け、土裳を避けて両脇の本棚に直撃した。

「・・・！？」

パチュリーは目を丸くした。今まで戦った相手に、自分の魔法を「斬れる」者など居なかったのだから。館の主である、彼女を除いては。

「ケホッ、ケホッ！貴方・・・一体」

「それ以上は止めときな、体に障るぜ。」

「ケホッ！大きなお世話よ・・・。L' eau de Dieu expulse le mal（神の水は悪を祓い）」

「させねぇよ。」

咳き込むのを抑えた後、パチュリーはもう一度魔法を唱え始めようとした。

その刹那、いつの間にか目の前に来ていた土裳に本を取られた。

「か、返しなさ・・・・ケホッ！カハッ！？」

突然、パチュリーは咳き込みながらその場に崩れ落ちた。

「ケホッ！一体・・・ケホッ！何・・・ケホッ！を・・・」

途切れ途切れに、弱弱しく言葉を発する。

土裳はそれを気にする風でもなく、辺りを見回し始めた。

そして一つの本棚を見ると、見渡すのをやめた。

「おい、そこに居るの。とっととこの子を連れて行ってやれ。」

その本棚に向け声をかけると、こうもりの羽が頭に生えた少女が恐る恐る出てきた。

「あ、あの・・・。」

「早くしてやんな。手遅れになる前に。」

「は、はい！」

少女はトテトテと走ってくると、パチュリーに肩を貸し、起こそうとした。

「やめなさい！」

「あっ・・・。」

パチュリーは少女を手で払い除けると、フラフラとよろけながら立ち上がった。

「パ、パチュリー様！」

「小悪魔、貴方は下がってなさい。」

「ですが！」

「これは私の戦いよ！貴方が出る幕じゃ・・・な・・・。」

言い終らないうちに、パチュリーは再び床に崩れ落ちた。
今度は気を失ったようだ。しかし、息は荒く汗も大量にかいていた。

「パチュリー様！」

小悪魔と呼ばれた少女がパチュリーに駆け寄る。
揺り動かすも、パチュリーは反応しない。

「・・・ほれ、言わんこっちゃ無い。オイ嬢ちゃん、あっしが行ってからこれ飲ませてやんな。」

土裳は懐から青色の薬を取り出すと、小悪魔に手渡した。

「これは・・・？」

「その子が患ってる病の特効薬だ。完全に治すには時間が掛かるけど飲めば落ち着くだろう。」

「・・・・・・。」

小悪魔は黙って土裳を疑惑が宿った目で見上げた。

「信じられないか？別にあっしはその子がどうなろうと構わないがな。」

土裳はカラコロと下駄の音を鳴らして歩き始めた。
数歩歩いた後、土裳は立ち止まった。

「まだ生きられる命を無理やり取ろうとは思わんな。」

そう言うと、土裳は地面を蹴って宙高く飛翔した。
そのままスピードを上げ、別館を後にした。

伍話　知識と日陰の魔女（後書き）

パチュリーが倒れた理由についてはまた今度。

陸話　従者

――――――紅魔館・本館内廊下

「景色が変わったな・・・。そろそろ本館か・・・？」

土裳は別館である図書館の廊下から、本館の廊下へと足を踏み入れていた。
先が霞むほどの長い廊下。土裳は飛んでいながらもその長さに少し飽き飽きしていた。
背中の背負子から煙草を取り出し、火をつけて一服する。

「ったく・・・何なんだこのクソ長い廊下は・・・。」

「クソ長くて悪かったわね。」

突然、土裳の後ろから声がし背中に冷たい感触がする。
振り向くとメイドの格好をした銀髪の少女が土裳の背中にナイフを突き付けていた。

「貴方は一体誰？此処に何をしにきたの？」

「ん～まぁ、異変解決ってとこだな。」

背中にナイフが突きつけられているとは思えないような軽い口調で土裳が少女の問いに答える。

「・・・ふざけているの？」

「い～や、これっぽっちも。」

そう言いつつも、おどけた様にへらへらと笑う土裳に少女は苛立ちを覚え始めた。

「いい加減にしないと・・・」

次の瞬間、少女の目の前から手に持っていたナイフと共に土裳の姿が消える。

そして、少女の首筋にナイフが後ろから突きつけられていた。

「しないと・・・なんだい？」

「な・・・っ！？」

「立場逆転だな・・・！？」

今度は少女の姿が消えた。

ズブリ。嫌な音が土裳の背中から聞こえる。

少女は土裳のやられたように後ろに回り込み、ナイフで土裳の背中を刺していた。

「おやおや・・・随分と血の気が多いな。」

土裳は背中に手を伸ばし、突き刺さったナイフを無造作に引き抜く。

引き抜く瞬間もその顔は痛みで歪む事は無かった。

土裳は振り向くと、少し離れた所に居る少女を見据えた。

「貴方・・・妖怪？」

「いや、只の人間だ。」

「とてもそうは見えないわね・・・。」

「自己紹介がまだだったな・・・。あっしの名は土裳。アンタの名は？」

「十六夜咲夜。」

銀髪の少女、咲夜は淡々と自分の名前を答えた。

「・・・で、咲夜。この館の主は何処に居る？」

「そんな事を知ってどうするつもり？」

「知れた事・・・。この異変を終らせる。」

「・・・っ！」

突如、土裳の周りに無数のナイフが現れた。
ナイフが的確に土裳の体を突き刺さり、貫いていくも土裳は倒れる素振りすら見せない。

「・・・どうした。これで終わりか？」

「ひっ・・・！」

体に何本もナイフが突き刺さっているのに倒れない土裳を見て、咲夜は初めて戦慄した。

「ま・・・まだまだ！幻符「殺人ドール」！」
咲夜がスペルを発動すると、先ほどとは比べ物にならない程のナイフが土裳を取り囲んだ。
しかし、土裳の姿は既にそこには無かった。
「ほう、時を操る能力か・・・。これは面白い。」
「なっ！？」
いつの間にか、土裳はナイフの射程外に立っている。
そして、手にはスペルカードが乗っていた。
「蟲符「時喰～トキカケルヒトヒラ～」」
土裳がスペルを発動すると、一つ。たった一発の弾幕が咲夜に向かって飛んできた。
咲夜はこれをいとも容易く避ける。
「・・・私をなめているの？」
「さあ。それはどうだろうな。」
その言葉が終ると共に、腕を何かに捕られ咲夜の体が壁に吸い寄せられた。
凄まじい音と共に壁に衝突する。
「・・・っ！？一体何が・・・！！」
捕られた腕を見てみると、藻の様な奇妙なモノが壁に貼り付き咲夜

の腕に絡み付いていた。

「そいつは人の生きた時間を喰う蟲だ。放って置けばお前さんの体は消えてなくなる。」

「・・・！？」

それを聞いて咲夜はナイフで蟲を斬ろうとするも、びくともしない。

「さて、この館の主はこっちか・・・。」

そう言って土裳は体に刺さったナイフを抜きながら廊下の奥のほうを見つめた。

「お嬢様のところへは・・・行かせ・・・ない！」

懸命に蟲にナイフを突き立て斬ろうとするが、それを嘲笑うかのように蟲は咲夜の腕を侵食していく。

「く・・・この・・・！離せ・・・！」

「暫くそいつと遊んでな。取れる頃には全てが終ってるだろう。」

土裳はそういい残すと、廊下の奥へと足を向けた。

「待って！」

咲夜の声を無視し、土裳は広間へと飛んでいった。

―――――――――――

「そんな・・・。お嬢様・・・。」

咲夜は自分の無力さと、主を守れない不甲斐無さにガクリと力無く項垂れた。

そして、幾筋の涙を流した。

「あの速度なら・・・まだ広間には着いていないはず・・・！」

そう言って再び断ち切ろうと蟲にナイフを突き立て始めた。

従者として、主を守るために。

陸話　従者（後書き）

次回、紅魔郷編最終回です。

漆話　紅月

――――――――――――――――　紅魔館・大広間

土裳は大広間へと続いているであろう扉の前に立っていた。
いつもの様に煙草の紫煙を吐き出すと、目の前にある扉に手を掛けた。

「この奥か・・・。」

そう呟くと、土裳は扉の取っ手を捻って扉を開いた。
その部屋は噂に聞く西洋の王室のようにも思えた。
土裳は眼球だけを動かして部屋を見渡すと部屋の奥にある、大きな窓を背にした玉座を見据えた。
座っていたのは蒼色の髪をした少女。
土裳は部屋の中央辺りまで進むと、その少女に話しかけた。

「アンタが・・・この屋敷の主かい？」

「あら、どちら様？」

少女はきょとんとした表情で土裳を見やる。
その様子を見て、土裳は呆れたようにため息を付いた。

「ハァ・・・。アンタ、あっしの事なんざとっくに気付いてんだろ？すぐに分かるような嘘を吐くんじゃねぇよ・・・。」

「・・・で、貴方は誰なのかしら？」

「まず自分から名乗ったらどうだい？」

「そうね、失礼したわ。・・・私の名はレミリア・スカーレット。お察しの通りこの館の主よ。」

「そうかい。あっしの名は久那土裳。・・・早速で悪いが、本題に入らせても？」

「・・・この紅霧を止めろ、かしら？」

「何だ、分かってるんなら話は早い。とっとと止めて貰おうか。」

「・・・・・・・」

レミリアは黙って玉座から降りると、玉座の後ろの窓を見つめた。

「・・・今日は、月が紅いわね。」

「そうだな。」

「この様な月夜にそのような事は無粋ではなくって？」

「だがそうも言ってられない。この霧の所為で現に重患も出てる。」

「・・・はぁ、貴方はムードという物が点で分かってないわね。」

今度はレミリアが呆れたようにため息を吐いた。

「ムード？言葉から察するに雰囲気の事か？」

「・・・そうよ。」

「そうかい、そりゃ失礼したな。」

土裳はおどけるように笑うと、背負子をその場に置く。

「・・・さてぐちぐち言ってても何だ、始めるか。」

「今宵の月は満月。こんなにも月が紅いから、本気でいくわよ？」

レミリアの口端がつり上がり、不敵に笑う。

土裳は煙草を口から離し、足で火を消した。

「やってみろ、何年も生きてねぇクソガキが。」

次の瞬間、レミリアの体が消える。

構える間も無く、土裳は宙に弾き飛ばされた。

「体はこの様に幼くても、生きている年数は５００。只の人間である貴方はそれを上回っていると言うのかしら？」

宙を舞っていた土裳は、何事も無かったかのように軽々と着地する。

「・・・なかなか速いな。」

「そう？ありがとう。」

レミリアは優雅に笑うと、スペルカードを構える。

「神罰「幼きデーモンロード」」

レミリアのスペルから無数のレーザーと弾幕が全方位にが飛び出す。
土裳は刀を納刀したまま構えると、意識を集中させた。

「動かないの？死ぬわよ。」

「剣圧「鎌威断」」

弾幕が土裳に当たろうかという刹那、土裳は刀を抜き放つ。
すると同時に刀から凄まじい風が放たれ、すべての弾幕が無に帰した。

「え・・・？」

「どうした？・・・まさかこんな程度じゃあ、無いよな？」

「と・・・当然よ。」

レミリアは自分のスペルをいとも容易く切り裂いた目の前の「人間」に初めて「戦慄」した。
と、同時に生半可な弾幕では目の前の人間を仕留められない事を悟る。

「その余裕、いつまで続くかしら？「紅色の幻想郷」！」

レミリアは自身が撃てる最高のスペルを発動した。
スペルカードから部屋を覆いつくさん限りの弾幕が放たれる。
しかし、土裳はそれを見ても平然と立っていた。

「狙いも密度も甘い。こんな弾幕じゃ古参の奴等には勝てないぜ？」

「な・・・ッ！？」

不意に真後ろから土裳の声がし、レミリアが振り向く。

「よっと。」

「カハッ…！？」

土裳がレミリアを叩き落す。
レミリアは床にめり込むほど勢い良く地面にぶつかった。

「さて、楽にしてやろう。」

土裳は空気を蹴り、凄まじいスピードでレミリアに肉薄する。
その瞬間。

「どっかーーーーん！」

「うおっ！？」

子供の声が聞こえたかと思うと、突然レミリアのすぐ近くの床に穴が開いた。
そして、穴から金髪の少女が元気良く飛び出した。
土裳は床の破片を避ける為に再び宙へと飛び退った。

「フ、フラン！？」

「あ、お姉様！」

レミリアは起き上がると驚嘆の声を上げた。
フランと呼ばれた少女はレミリアの姿を見ると、レミリアに思い切り抱きついた。

「貴女ここで何をして・・・いや、丁度いいわ。フラン、ちょっと手を貸しなさい。」

「ん？いーよ！」

フランと呼ばれた少女は楽しそうに頷いた。

漆話　紅月（後書き）

長さの都合で前後編になりました。

捌話　狂気

「・・・？」

土裳はフランと呼ばれた少女が出てきてから漂っている異様な気配に気付いた。
ただ、土裳に向けられている純粋な殺意と憎悪、何とも言えぬソレは目の前にいる二人の少女からではないことは確かだった。
その殺意の正体を突き止めようと、土裳は動くのを止め意識を集中し始めた。

「お兄ちゃん、動かないと死んじゃうよ？」

フランはそう言うと、手を前に出し、その手を力強く握る。
その瞬間、土裳の左腕が音を立てて弾け飛んだ。
土裳の腕は館の床に音も無く落ちた。

「・・・」

「あれ？頭をどっかーんってさせたのに、何で腕なの？」

「・・・邪魔をしないほうが身の為だぞ？」

土裳はそう呟くと、今まで見せてきたような目になった。
そして次の瞬間にはフランの真後ろに立っていた。
土裳は腰の刀を抜くと、フランの首に後ろから突きつけた。

「フラン・・・！」

「おっと・・・二人とも、動くなよ？」

二人に忠告すると、土裳は再び意識を集中させ始める。
しかし既に殺意は消えうせ、特定する事は出来なかった。

「・・・チッ」

「禁忌「スターボウブレイク」」

フランがスペルカードを発動すると、フランを軸に大量の弾幕の矢が真上に発射された。
弾幕に当たらぬよう、土裳がフランから刀を離し大きく跳び退る。
そして、放たれた矢は土裳目掛けて雨のように一斉に降り注いだ。

「・・・・・面倒だな。・・・うっ！」

土裳は一瞬苦しんだかと思うと、刀を鞘に収めそのまま手に意識を集中させる。

「・・・！！フラン、離れなさい！」

「剣圧「鎌威断」」

土裳は刀を抜き放ち、風を放つ。
先程のようにすべての弾幕が無に帰しただけではなく、その風はフランに襲い掛かった。

「・・・ひっ！」

「フラン！」

フランに風が当たろうかという刹那レミリアがフランを押し、風の軌道からフランを外した。
しかし今度はレミリア自身がその軌道に入ってしまった。

「お姉様・・・！」

フランが手を引っ張ろうとするも、土裳の風は間合いに入ってきたレミリアを無慈悲なまでに容赦なく切り裂いていく。
そして風はレミリアを巻き込んで吐き出したあと館の壁に衝突し、壁を深く抉って消えた。
フランがレミリアの元へ駆けつけるが、レミリアはピクリとも動かなかった。

「いや、いやあ！お姉様ああ！」

泣き叫ぶフランに土裳が刀を手に提げたまま、ゆっくりと近付いてきた。
その気配に気付き、フランがレミリアの前に立ちはだかった。

「もうやめて！お姉さまをもう虐めないで！私はどうなっても良いから！」

大粒の涙を目に浮かべながら、フランは懇願する。
しかし、土裳は元々感情が無かったかのように無表情で近付いていく。
そして刀を振り上げ、フランに斬りかかった。

「いやっ・・・！」

「妹様！」

ギィンという乾いた音と共に、咲夜がフランと土裳の間に割って入る。

しかし土裳の刀は咲夜のナイフを紙を切るようにいとも容易く切った。

「きゃっ・・・！？」

「咲夜！」

「・・・・・・・・・・・・・」

土裳は無表情のまま刀を鞘に収め、懐からスペルカードを取り出した。

「暴風「那都比古神（しなつひこのかみ）の御息」」

土裳がスペルを発動すると土裳を中心に凄まじい風が吹き、それらが刃となる。

風は二人を巻き込み、動かないレミリアと共に音を立てて壁に叩きつけた。

叩きつけられ、二人は気を失った。

――――――――――――――――

「う・・・うん・・・？」

咲夜が目を覚ますと、何故か自分は布団で眠っている。
辺りを見回すと、囲炉裏のすぐ傍に土裳が鍋をかき回していた。

「起きたか。」

「え・・・？」

「今すぐこれを飲め。直に里の人間が来る」

そう言って土裳は懐から数枚の薬包紙が一括りになっている薬を取り出した。

「それよりも、お嬢様は・・？！」

「お前の後ろだ。・・・早く行け」

「敵である貴方が、何故私達を・・・？」

咲夜がふと思い浮かんだ疑問を口にする。
すると、土裳はにこやかに笑って答えた。

「そこに生きるべき命が有るからだ」

「・・・・・・」

「土裳、いるか！？」

その時、土裳の家のドアが勢いよく開いて慧音が顔を覗かせた。
しかし既に咲夜達の姿は無い。

―――――――――

後日、土裳の家に幾つかの紅茶の缶と共に一通の手紙が置いてあった。

どうやらレミリア達が礼の一つとして置いて行ったらしい。

「・・・悪魔の名に置いて借りを返す、ねぇ・・・」

そういうと、土裳は紅茶の缶と手紙を交互に見つめる。

「好きにしやがれ、小娘が・・・」

この後、紅茶が何なのか分からずに土裳が阿求の舘へ行って淹れ方を訊いたのはまた別の話である。

捌話　狂気（後書き）

これにて紅魔郷編は終了です。
次回からは妖々夢、何と次回からは土裳の過去も明らかになって生きます！
乞うご期待！

玖話　因（前書き）

お久し振りです。

玖話　因

紅魔異変より半年　とある冬の日――――――

土裳はこの日、人里にある阿求の邸に来ていた。
別段用があった訳ではない。里に下りた序に紅魔異変での病の経過を見に来たのである。

「うん、元気そうで何よりだ。」

「ありがとうございます、わざわざ来て下さって・・・。」

阿求が深々と土裳にお辞儀をして礼を述べる。

「・・・にしても、この邸に来るのも随分と久方振りか・・・。」

胡座をかいた土裳が、銜えていた煙草から口を離してポツリと呟く。

「ええ、土裳様が最後にいらっしゃったのは私がまだ幼い頃でしたから。」

「懐かしいな・・・。」

「そうですね・・・。」

するとその時。

「あの、阿求さん・・・。」

不意に後ろの襖が開かれ、中から白髪で緑色の服を来た少女が顔を出した。
阿求がそれに気付いて振り返る。
「お疲れ様です。お探しのものは見つかりましたか？」
「いえ、それが・・・・。」
「そうですか・・・お力になれずすいません・・・・。」
「そんな！特別書庫までお見せ頂いて・・・！」
「ですが・・・・。」
「・・・何だ、先客がいたのか。」
「あ、は、初めまして！」
少女は土裳の姿を確認すると、すぐに体を直角に曲げて挨拶した。
そんな少女とは裏腹に、土裳は微笑みながら返した。
「ん、初めまして。あっしの名は久那土裳。妖怪の山の麓で蟲師という仕事をやってる。」
「つ、土裳！？・・・も、申し遅れました！私、白玉楼で庭師をしている魂魄妖夢と申します！」
土裳の名前を聞いた途端、先程以上に畏まって自己紹介をする妖夢。
「ほう、白玉楼の・・・。懐かしいな、あそこへはもう百余年と行

って無い・・・。妖夢ちゃん・・・って言ったね？魂魄の名に庭師と言うと、あの妖忌の娘さんかな？」

「いえ、孫です。」

「そうかそうか・・・。・・・で？」

「はい？」

「あの小僧・・・妖忌は元気にしているか？」

「い、いえ・・・。あの・・・。」

先程までのはきはきとした態度とは違い、少し迷ったように言い淀む。

その様子を見て土裳は邸の外を見上げ、遠い目をしながら煙草の紫煙を溜息と共に吐き出した。

「ふう・・・。・・・そうか、小僧は逝ったか・・・。時が流れるのは早いな・・・。」

「あの・・・土裳様・・・？」

「あ、ああ・・・。すまない。聞いた所、何か探してるみたいだな。あっしで良ければ知ってる範疇で答えよう。」

「それは良いですね。土裳様の知識は此処にある書物の数十倍はありますから。」

「そ、そんな！土裳様の御手を煩わせるなど・・・！」

妖夢は驚いた様子で手を振ってそれをしようとはしない。そんな妖夢を、土裳はどこか懐かしそうな様子で見つめた。

「フフ・・・固い、な。その固さも祖父譲りか・・・。あっしに遠慮など要らない。聞きたいことがあるなら訊きなさい。」

「で、ですが・・・。」

なおも言い淀んだままの妖夢に、土裳は小さく溜息をつく。

「ハァ・・・。なら、命令だ。・・・主が知りたき事、我に問うてみよ。」

その言葉と共に、部屋の空気が一気に張り詰める。まるで、蛇に睨まれた蛙の様に阿求と妖夢はその場から動けないでいた。そんな空気の中、妖夢が小さく震えた声を押し出すように発した。

「・・・咲かない、花を。咲かせる・・・方法を、探しております・・・。」

「・・・そうか。」

土裳は一言呟くと、その場を立った。

「・・・阿求。薬室、一寸借りるぞ。」

「・・・どうぞ。」

土裳はそのまま部屋を出ると、薬室のほうへと歩いていった。

「・・・ハアァ。」

「ふう・・・。」

土裳が出て行った途端、今さっきまでの威圧感が嘘の様に引く。それと同時に、二人はほっとした様に溜息をついた。

「・・・ビックリしました。土裳様って、いつもあんな風なんですか？」

「いえ、普段は気さくな方ですよ。ただ、最近は気が立っているようです。『あの方』が戻られていないのが心配なのでしょうね・・・。」

「『あの方』・・・？」

「ええ、『あの方』と言うのは・・・。」

ガラッ

「薬、出来たぞ。」

「！！」

「！！」

「・・・？どうした？」

「い、いえ！何でも！」

「ええ、何でもありません！」

突然出てきた土裳に、二人は肩が跳ねるほど驚いた。その様子を見て、土裳は訝しげに二人を見つめる。

「そうか・・・。妖夢、これをその咲かない花に使うといい。効く筈だ。」

そう言って、土裳は薬束を妖夢に投げてよこした。

「わわっ・・・！あ、ありがとうございます！」

「気にするな。」

「で、では私は邸へ戻りますね！」

「ああ、気をつけてな。」

妖夢は薬を受け取ると、嬉しそうに微笑みながら邸を出て行った。

「・・・あっしもそろそろ帰るか・・・。」

「また、いつでも来てください。歓迎の用意はしておきますので。」

「・・・ああ、頼む。」

そう言って、土裳も稗田邸を後にした。

しかし、彼はまだ気付いていなかった。
今さっき、自分が起こした『過ち』を。
そして、その『過ち』が一体何を起こすのかを。

玖話　因（後書き）

さて、次回から妖々夢本編開始です。
このまま書きますので、そんなに間は無いかと。

ご感想・ご評価お待ちしております。

拾話　果（前書き）

さあ、妖々夢編開始です

拾話　果

――――――　前回より数ヶ月　初春

土裳はふと、外からの異様な寒気に気が付いた。
扉の隙間や板の間からのそれは、とても春に入ったとは思えない、冷たいものだった。
その時、土裳はえもしれぬ妙な胸騒ぎに襲われた。その衝動に後押しされるかの様に、土裳は家の扉を開けた。

「…一体、これは…？」

土裳は目の前にある信じられない光景に目を疑った。

「…何故、こんな事に…！？」

その時、土裳の脳裏にある言葉が過った。
『咲かない花を、咲かせる方法を探しています。』

「…まさか。いや、待て…。」

土裳は力無くよろめくと、壁に倒れるように凭れ掛かり、自身の額を押さえた。

「白玉楼の庭師に咲かぬ花…。何故、気付かない…！何故、あっしは薬を渡した…！？」

二、三分程土裳は扉に凭れ掛かったまま、前の己の行動を悔いた。

ふと、土裳は眩いばかりの白に、小さな桃色を目にした。
それは、まだ蕾の開いていない、桜の枝。

「…そうか、あの花を咲かせるにはあっしの薬だけでは無理か…。
なら、今ならまだ間に合うか…？」

土裳は何かを決心したかのように一人頷くと、急いで家の中へ入った。
そして、背負子を乱暴に掴み、傍の棚の中から幾つかの薬を取り出して背負子の棚の中へと移すその作業を幾回か行うと、土裳は背負子を背負い、家を後にした。

拾話　果（後書き）

感想、ご評価お待ちしてしてます。

拾壱話　雪女

――――――　マヨヒガ付近

土裳は家を出た時点から、異様な気配を感じていた。
死臭の様にこびり付いてくる気配に、土裳は自分も気がつかぬ内に右手が震えていた。
先程見掛けた桜の枝の方向を進んで行くと、徐々に春の風が強まり、所々に桜の花弁が落ちているのが見受けられる。

「樹もないのに、花弁だけ…？」

土裳は花弁を妙に思い触れてみる。
すると、花弁は土裳の手に触れたとたん、小さな光と共に消えた。

「なるほど…。この花弁は実体ではなく、この幻想郷自体の『春』か…。しかし、何故こうなっている…？…春が…形を持つ…。」

土裳は短く無精髭の生えた顎に手を当て、考え始めた。
その時、土裳の傍をチルノとあまり見慣れぬ女性が通り抜けた。

「あ…！！」

チルノは土裳を見つけると、素っ頓狂な声を上げた。

「…！！お前は…紅魔異変の…。」
「チルノ、お友達？」
「……。」

女性の問い掛けに、チルノは黙って女性の後ろに回り込んだ。
どうやら怯えているらしく、その小さな肩はカタカタと震えていた。

「…貴方。」

女性が静かに怒りを溜めた目で土裳を睨む。

「子供を恐がらせるなんて、結構な趣味をしてるのね？」
「…何を言っている？あっしにそんな趣味は無い。」
「じゃあ、この子は何でこんなに怯えているのかしら？」
「何、前の異変で少し…な。…まあ、何でもいい。あっしは少し急いでる、先へ行くぞ？」

土裳が地を蹴り、春の濃い方へと向かおうとする。
すると、上空から人一人は裕に潰れそうな氷柱が幾本も目の前に落ちてきた。

「…何のつもりだ、小娘？」

土裳が強い怒気を含んだ目で女性を睨み付ける。
次の瞬間、土裳の左腕が泡立ち始めた。

「うが…ぁっ！？」

土裳は苦しそうに呻くと、左腕をおさえてその場に膝をついた。

「……っ……！！」
「貴方…大丈夫？尋常ではなく苦しそうだけれど。」
「…ハァ…ハァ…！」

苦しみが少し治まったのか、土裳はよろめきながら立ち上がった。
「…もう猶予は無いか…。おい。」
「何かしら？」
女性は訝しげな視線を向けながら答える。
「…まだ、邪魔をするか…？」
「大切な友人がこんなに怯えているんだもの。そりゃあ…」
女性は言葉を言い終わる前に鮮血と共にその場に崩れ落ちた。
「禍符「黄泉醜女の犬歯」」
「へ…？レティ…？レティ！？」
チルノが突然倒れた女性にすりより、揺り起こそうとするも、女性はピクリとも動かない。
「アンタ…許さない！大ちゃんを助けてくれたのに、何でレティを殺し…」
チルノもまた、言葉を最後まで繋ぐ事は出来なかった。
「時間が無い。…それだけだ。ただな、血が出たからからと言って、死ぬわけじゃない。ましてや、妖怪ならこんな程度では死なんよ。」
土裳は背負子を降ろすと、動かぬ二人の治療を始めた。
そして、一通り終えると地を強く蹴り、春の風が濃い方へと足を向けた。

拾壱話　雪女（後書き）

何故土裳が「苦しんだ」のか？
猶予とは一体…？

真相は妖々夢編終盤にて！！
それまで、乞うご期待！！

拾弐話　猫又

――――――　マヨヒガ

土裳が桜の花弁を追い続けていると、いつの間にか周りが山ではなく集落のような風景になっていた。

「ここは…。」

土裳は足を止め、辺りを見回す。

そして、何を思ったのか近くにある家の壁に触れると、優しく微笑んだ。

「ふふ…懐かしいな…。あの頃そのままだ…。」

その時、他の家の中から小さな女の子が顔を出した。

「あ、あの…。」

「ん？」

土裳が声のした方向に顔を向けると、猫耳に一対の尻尾を持った女の子が小走りで駆け寄ってきた。

「やっぱり！土裳様、お久し振りです！！」

嬉しそうな女の子とは逆に、土裳は訝しげな顔をしていた。

「……誰だ？」

「！！」

首を傾げながら土裳が訊くと、女の子はショックを受けた様な顔をして俯いてしまった。

「うう…。土裳様…酷いです…。本当に覚えてませんか？」

「…すまん、分からない。」

「私ですよぅ…。藍様の式の、橙ですよぅ…。」

橙は尻尾をしゅんとしならせ、淋しそうに自己紹介をする。

数秒止まった後、土裳は思い出したように手を叩いた。

「ああ、思い出した。…すまないな。最近会ってなかったから、失念していたよ。」

「えへへ…。」

謝りながら、土裳は橙の頭を被っている帽子越しに撫でてやる。

すると、橙はさも嬉しそうに尻尾を交互に振る。

「土裳様土裳様…！」

「ん？何だ？」

「あのですね、私もあれから藍様に弾幕を教えて貰ったんです！」

「ほう。」

身ぶり手振りを踏まえながら一生懸命説明する橙を見て、土裳の顔はいつの間にか慈しむかの様に綻んでいた。

「それでですね、土裳様に弾幕を見て欲しいんです！」

「……。」

その言葉を聞いた途端、土裳は優しそうな顔から一転して笑みが消えた。

「…すまない。今は、無理だ…。」

「へ…？」

土裳の返事が予想外だったのか、橙は目を丸くした。

「何でですか…？やっぱり、私じゃ相手にならないからですか…？」

今にも泣きそうな様子で、橙は呟いた。

そんな橙の頭を土裳は優しく撫でてやる。

「いや、それは違う。」

「ふぇ…？」

「急ぎでやらなければいけない事があってな。それで、今は無理なんだ。」

「……。」

「だから、橙の弾幕を見てやれるのはその後だ。…だが、全てが終わったら必ず見てやる、約束だ。」

そう言って、土裳は橙の頭に置いていた手を離し、小指を出す。

「…本当ですか？」

「ああ、約束だ。」

「……。分かりました！」

橙は一瞬迷ったような様子だったが、決心がついたのか元気良く返事をした。

「よろしい。…そうだ。ついでで悪いが、一つ頼まれてくれないか？」
「はい！何ですか？」
「紫に『楼閣の妖怪が目を覚ました』と伝えてくれ。」
「分かりました！」
「頼んだぞ。…じゃあ、またな。」

土裳が地を蹴り、マヨヒガの出口に向かおうとした時、不意に橙が声をかけてきた。

「土裳様…？」
「ん？」
「『楼閣の妖怪』って、何ですか？」
「…橙。」

土裳は足を止めて向き直り、橙の額を軽く小突いた。

「ふにゃ！？」
「この世にはな、知らない方が良い事がある。」
「……？」
「これもその一つだ。余計な詮索は九つの尾を持つ化け猫をも殺すぞ、橙。」
「はわわわ…！」

冗談混じりの土裳の言葉を真に受け、わたわたと慌てる。

「分かったら早く行きなさい。いいな？」
「は、はい！」

橙がマヨヒガから出るのを見送り、土裳はその場を後にした。

拾弐話　猫又（後書き）

ご感想・ご評価お待ちしてしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5282t/

東方蟲妖伝

2011年11月17日12時10分発行